

グスクの石積み遺構に係る若干の考察
—周辺地域との関係性を射程に入れて—

山本正昭

The consideration which is slightly related to Piled stones of GUSUKU

Masaaki YAMAMOTO

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第12号別刷

2019年3月29日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.12

March, 2019

グスクの石積み遺構に係る若干の考察 —周辺地域との関係性を射程に入れて—

山本正昭¹⁾

The consideration which is slightly related to Piled stones of GUSUKU

Masaaki YAMAMOTO

はじめに

北は奄美諸島から南は沖縄本島の間まで169の島々で構成されており、うち31が有人島である。これら有人島には「グスク」や「グシク」「グシュク」と呼ばれる遺跡が必ずと言って良い程、存在しており、その性格は城郭や集落、祭祀場、墓など多岐に及んでいる^(註1)。とりわけ沖縄本島中南部では大規模な石積みを有した城郭としてグスクは一般に認知されており、石積みを有するグスクを対象に当該地域では、文化財指定や史跡整備化を押し進めている地方自治体も少なくない。また、グスクは観光地としてガイドブック等に取り上げられることも多く、それに使われる宣材写真にはほぼ例外なく、聳え立つ石積みが被写体の対象となっている。このように沖縄本島中南部においてはグスクの代名詞と言って良いくらいに石積み遺構が取り上げられる機会を多く見ることができる。

一方でグスクの石積み遺構は海外からの影響を強く受けている、という指摘は過去に幾度かなされている。古くは城郭研究者の鳥羽正雄が1942年に『城郭と文化』において「(沖縄の)城に高い石垣を築くことというのは、中国の城郭を知ることによって若干暗示を得たかもしれない」との指摘を皮切りに考古学、土木工学、歴史学など多方面から同様の指摘が繰り返されてきている。しかし、具体的に構造面にまで踏み込んで検討されたことはこれまでにほとんど見ることができない。

本論では石積みの形態面と構造面の両面からグスクと琉球列島以外の城郭遺跡と比較、検証を行って

いくものであり、このことから見出される石積みを有したグスク^(註2)に伴う石積み遺構の成立背景と周辺地域からの影響についての考察をまとめにおいて若干、行っていきたい。

1. グスクの石積みの構造と形態

まずはグスクに見られる石積みの構造についていくつか確認していくが、本章では石積みの組み方ならびに積み方についてはとくに詳しく触れていくものではないことを先にことわっておく^(註3)。

沖縄本島及び周辺離島では南部に113ヶ所、中部に65ヶ所、北部に45ヶ所のグスクが確認されており(沖縄県教育委員会1985)、とくに中南部においては石積みを有するグスクを多く見ることができる。面石を精巧に加工した切石積み、相方積みが見られるグスクは20カ所ほどに限られ、自然石を面石とする野面積みが見られるグスクが大半を占めて

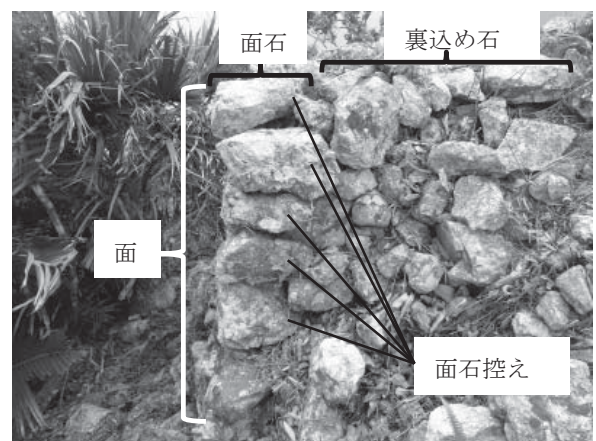


写真1 賀陽グスク石積み断面

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

いる。面石の反対側、すなわち控え側には小振りな自然石を充填しており、この自然石を裏込め石として一般的に呼んでいる（写真1）。

グスクに見られる石積みの内部構造についての検証は意外に少なく、管見の限りでは當眞嗣一が「内外夾築式」と「外築内托式」の二形式に大別し、考察した以外に見ることができない。當眞が言うところの「内外夾築式」とは面石よりも小振りな裏込め石を内部に充填させる内部構造、「外築内托式」とは外面のみ石材で覆い、内部は土砂で詰めるといった内部構造として位置付けている。また、首里城跡における外郭城壁では面石に埋もれるように別の面石を有した石積みが発掘調査において確認されている（沖縄県立埋蔵文化財センター2004）。

また、グスクの石積みの下部には低い石積みを城壁に沿うようにして配置しているのも確認できる（写真2）。これは切石積みや相方積みで立ち上げられている城壁には見られず、野面積みや割石で積まれた石積みにおいて散見することができる。石積みの基底部にかかる加重の受けは相方積みや切石積みと比べて、加工度の低い割石や自然石を用いた野面積みは脆弱となる。そこで基底部近くを低い石積みで取り巻くことで、外へ押し出す加重に対応することができる。この補強として機能する石積みの導入により、更に高い石積みの構築が可能となった。



写真2 与論グスクの城壁

次に石積みの形態に関しては、その上面は平坦面を有している事例が大規模なグスクでは多く見ることができる。これらの石積みは内面と比較して外面

を高く積んでおり、上面の平坦面は場所によってその幅が変わる。また、外面に対応するように守り手が身を隠し、防ぐための低い壁が見られる（写真3）。また、勝連グスクや今帰仁グスク、与論グスクでは高低差を有している部分において、外側のみ面を有する石積みが見られる。これは内部空間を確保するため、縁辺部を土留めとしての機能させる意図が見られる（写真4）。また、勝連グスクや与論グスクでは斜面部に小空間を確保するために土留めの石積みを配置させるといった事例も見受けられる（山本2015）。他方で小規模なグスクに関しては野面積みを0.5～1.5m程度に積み上げたものや自然石を積み上げただけの、石塁状の石積みを見ることができる（写真5）。前者においては大規模なグスクと同様に内外に面を有しており内部を裏込め石で充填させる、いわゆる「内外夾築式」になる。面石については自然石又は割石の平滑面を面側にして組み上げ

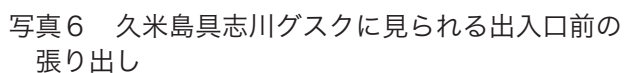
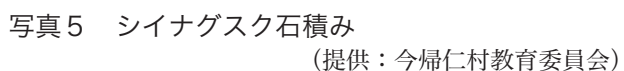


写真3 今帰仁グスクの城壁胸壁



写真4 勝連グスクの土留め石積み

これらの石積みを有するグスクは規模の大小により、その形態を異にしているが、共通しているのは斜面部と平場との境に設置し防御ラインとして機能させている点がある。基本的に緩斜面や出入口付近といった、防御上における弱点となる部分において石積みが配置される（當眞1985）。更に出入口付近においては石積みを屈曲させて、横矢掛りを利かせるといった特徴（写真6）も見られることから、単に防御塁線としての機能にとどまらず、防御時の基点となるような機能も持ち合わせていると言える。



本章においては中國大陸の中でも沖縄本島から最も近い福建省に分布する、グスクと同時期に機能していた14世紀後半～16世紀の城郭に見られる城壁について触れていきたい。まずその前にどのような城郭が当該地域に分布しているのかについて触れていきたい。

これら所城については現在も城壁や城門、護城河といった遺構を残している事例を少ないながらも見ることができる(註4)。それら残存状況が良好な所城を概観すると福建省内に残る所城の規模に関しては、城壁周長が2000～3000mで、面積は最小のものでも1万㎡を優に越える。また、出入口は甕城(註5)となり、城壁には張り出し施設である「馬面」(写真7)が取り付くといった防御性を見て取ることができる(註6)。そして、それらの多くが1387年に築城されているといったことが文献史料から窺い知ることができる(蘇2014)。

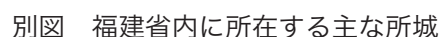




写真7 莆禧所城の馬面

中国全土から見ると城壁は磚積み（写真8）、すなわち煉瓦積みや土壁が一般的であるが、福建省内に見られる城壁は石材で構築されている。これは福建省内では石材が豊富に産出されることにより、当該省内の所城は全て石材で城壁の面が立ち上げられている。面に見られる石材は切石や割石を使用しており、横目地が通るものが多く見られる。

この石積みの城壁形態については内外面共に面を有しており、その上面は平坦面が見られる。そして、外面に対応するように低い壁が設置されているのを見ることができる（写真9）。この低い壁を「女牆」と呼称し、守備側における盾として機能する。また、城壁の内部構造においては黄土が充填されていることが確認される（写真10）。天水は全く城壁内に浸透しない程、黄土は強固に吐き固められており、面石の控えは黄土に接して立ち上げていることから、



写真8 磚積みの城壁（山東省登州水城）



写真9 大京城堡城壁の女牆



写真10 大京城堡城壁

裏込め石は全く見ることができない^(註7)。基本的に外側のみ石材を用い、内部は土が充填される、いわゆる外築内托式であると言える。

所城については先述したようにかなり大規模であり、グスクの中でも最大規模を有する首里城でも城壁の周長は約1000mであることから、単純に比較することができない。このことから所城以外において福建省内では集落民が倭寇から守るために構築した城壁を有する集落についても比較材料として次章では取り扱っていきたい。というのは、それらは城壁の周長が500～1500mであることから、大規模なグスクと規模的にあまり差が見られないことに加えて、所城よりも多く福建省内において構築されていることを理由とする。

3. 福建省に見られる所城以外の城郭

福建省でもとくに北部に位置する霞浦県の沿岸部

は海岸線が複雑に入り組んだリアス式海岸となっている。とくに東吾洋及びその周辺はかなり海岸線が複雑に入り組んだ内海となっているため、洋内は波が穏やかで泊に適した小さな湾を多く見ることができる。このような地勢は海上での移動と停泊が容易であることから、現在もこの洋内を漁場や養殖域として利用されていると共に、幾多の漁村を東吾洋に面した沿岸部近くに見ることができる（写真11）。

現在は長閑な漁村の風景が広がる一帯であるが、14世紀後半～16世紀にかけて当該地域では倭寇による被害が多く見られた（鄭2013）。倭寇対策が喫緊の課題となったことにより、集落の外縁部に石積みによる城壁を構築して、倭寇に備えていく状況が14世紀後半から見られるようになった。ほぼ同時期に衛所制度が整備されて、倭寇対策に一定の成果を見ることになるが、15世紀後半からその制度が弛緩していくことになる。それは軍規の乱れや、軍籍の偽装などが横行する（鄭2013）ことで前線基地としての千戸所が機能不全になっていくことに起因する。あわせて、郷紳と呼ばれる地方有力者と地方官使が結託し、密貿易を拡大させていくという動きが見られるようになってくることから、沿海部の治安が再び悪化していくことになる。

以上のような背景から最終的には16世紀の半ばには40を越える集落において城壁が集落民によって構築されることとなり（黄1967）、福建省内でも『古城の郷』と呼ばれるほど、城郭集落が密集する地域となった。



写真11 東吾洋



写真12 長溪城堡城壁断面

近年において、集落での城壁管理意識低下による城壁の崩壊や通行の利便性を図るために城壁が撤去されるなどして、それが完全に失われた集落も多数あるがそれでも現在、20カ所ほどの集落において城壁が残存しているのを確認することができる^{（註8）}。これらの集落を取り囲む城壁は、内外面が共に面石が組まれ、内部には黄土が充填されている。更に内部に充填されている黄土はかなり固く締まっており、面石の控え部分と接している（写真12）。また、城壁の上面は人が往来できるほどの幅を有しており、外面に対応する低い壁「女牆」を設置している事例も見ることができる（写真13）。これらのことから前章で取り上げた所城の城壁と基本的に形態並びに工法は同じであると言うことができる。対して、出入口は1か所を除いて平入りで^{（註9）}、馬面が城壁に取り付く事例は管見の限り、確認することができなかった点で所城とは大きく異なると言える。

このように城壁の形態並びに工法に関しては所城との共通性が見いだされるが平面形態について相違点が見られるのは、規模的な要因か、技術的な要因か、それとも構築の規制が関わっていたのかその要因については今後の検討課題と言える。

何れにせよ、14世紀後半～16世紀においては明朝だけでなく倭寇の被害に曝される各地が民間人も自衛のために生活域に近接して城壁を構築していくという意味では、当該期の福建省は築城ラッシュであったと言える。



写真13 八堡城の女牆

4. 両地域に見る石積みの形態

沖縄本島中南部に見られる石積みグスク、とくに面石に切石や割石を用いている大規模な石積みグスクと中国・福建省に見られる城郭の城壁とは、基本的に外観は同形態であると言える。しかし、その構築方法において両者は大きく異なる。それはグスクの城壁内部においては裏込め石で充填させている点と中国・福建省の城郭の城壁内部においては黄土を充填している点での大きく異なっていると言える。この相違点で注目されるのが中国・福建省の城郭に見られる城壁において雨水はどのように処理されているのかである。

中国大陸の城郭遺跡でよく見られる土を幾層にも積み重ねて吐き固めて立ち上げていく、版築工法においては、土が水を含有させない程、固く締まっている。版築工法により構築された城壁はその内部

に雨水を通さないことが前提となっている（福島2016）。そのため、雨水を地下へ浸透させるのではなく、すぐ外部へ排水させるため、「護城河」と呼ばれる、小川が流入する堀を城壁の外側に沿って巡らせている（写真14）。中国大陸の城郭に見られる城壁はその内部に雨水を浸透させずに城外へ排水するという排水方法を採用している。

一方で石積みグスクにおいては城壁内部を裏込め石で充填することであえて、内部に雨水を浸透させ、地下へ流すといった排水方法を採用している。これは地質的な要因が考えられる。沖縄本島中南部の丘陵部では主に多孔質の琉球石灰岩が基盤層となっていることから、地下へ水が浸透し易い性質と言える（木崎1986）。このことから、溝や堀を地表面に構築して排水を行うよりも琉球石灰岩層下部の島尻泥岩層まで雨水を浸透させた方がより合理的であると言える。故に、沖縄本島中南部に所在するグスクの石積み根石は琉球石灰岩上に根石を据えるといった事例がかなり多く見ることができる（写真15）。加えて、沖縄本島中南部における丘陵部は一部例外も見られるが、主に琉球石灰岩で構成されている。このことは大量の裏込め石^(註10)を確保できる状況にあったことを意味している^(註11)。

沖縄本島中南部において石積みグスクが広く分布するようになった要因として琉球石灰岩との関係性を無視することはできない。と同時に、基盤層の有り方並びに石材供給が一定程度可能であるといった、複数の条件が揃ったことが、中国・福建省における城壁とは異なる工法をグスクの石積みは志向し



写真14 大京城堡の護城河



写真15 石灰岩盤上に設置される石積み(伊波グスク)

ていったと評価することができる^(註12)。

5. まとめー比較検証を通してー

これまで触れてきたようにグスクの城壁に石積みを導入するという考え方は、同時期に城壁に石積みを採用し、機能している地域の城郭からの影響を受けているという想定は可能である。つまり中国大陸の城郭における城壁の外観を大規模な石積みグスクに見られる城壁は採用したとする論点は否定することはできない。しかし、その工法という側面から見たとき、両地域において全く異なることは再度、本章で強調しておきたい。更に付け加えると、加工度の低い割石や自然石を用いた野面積みの基底部近くに見られる、鉢巻状の低い石積みについても中国・福建省の城郭では管見の限り確認することができない。これらのことから、高く石積みを立ち上げる工法についてはグスクよりも中国・福建省の城郭がその処理を円滑に行っていると評価できる^(註13)。

形態的に類似している両地域の城壁ではあるが、その内実としては全く異なる工法であることから、グスクに見られる石積みの構築技術の発生と深化について新たに検証を加えていく必要があることは言うまでもない。そこで仮説として以下のような石積み構築技術の展開を示しておきたい。

沖縄本島及び周辺離島では13世紀後半からグスクに石積みが採用されてくるが、それは面石や裏込め石といった明確な区分ができないほど、面側と内部の石材の大きさには差は認められない。また、第2章で触れたように石材をマウンド状に積み上げて石塁として構築されている石積みグスクも見ることができる(山本2016)。このように面を有さない石塁では傾斜角が緩く、かつ障壁として機能させるためにはその高さに自ずと限界が生じてくる。より防御性の向上がグスクの石積みに要請された際に、新たな技術開発として石積みの高層化が命題となっていたことは必然であったと言える。石積みの高層化に向けた新たな技術導入として、石積み面の石材とその内部に充填する石材の使い分け、すなわち面石と裏込め石との区分を明確にしていくということが図られていったと考えられる。仮に13世紀後半のグスクに障壁機能として土塁が多用されていたのであれば、中国大陸の城郭と同様の城壁構造へと昇

華されていったことも充分に考えることができる^(註14)。しかし沖縄本島中南部では、石材を多く供給することが可能であるが故に、従来までの石塁構築技術を継承した形の工法へと昇華させていった可能性を挙げることができる。14世紀後半にはグスクの大規模化に伴って、城壁は切石を多用し更に高層化していくことで、面石の成形されており大きく、裏込め石は自然石で小振りにするという差別化が徹底されるようになる(写真16)。

以上はあくまで若干の考察であり、より厳密な検証を通して具体的な事象について踏み込んでいく必要がある。そのためには将来的な石積みグスクの発掘調査成果に依るところが大きいことは言うまでもない。また、他地域との比較を通して検証を不断に行っていくことで、グスクの成立ならびにその発展段階について次第に明らかになっていくことは言を俟たない。それは東アジアにおける城郭の中でグスクが奈辺に位置づけられてくるのかという新たな課題に直面することと^(註15)、東アジアにおける城郭史の意味を問うことに繋がっていくものと思われる。



写真16 中城グスク石積み断面

【註】

(註1) グスクの名称に関しては山本2017にて、その用例について触れている。ここで取り扱う遺跡としての意味を含ませているグスクは便宜的に「グスク」の名称で統一する。

(註2) 以下、石積みグスクとする。

(註3) 石積みの技法について詳しく触れたものは當眞1988、1990がある。この論考ではグスクの

石積みに見られる石材の組み方を軸に2群、10類に分類し、編年を試みている。また、北垣1991においても、沖縄の石積み技法を石材の組み方から技術的系譜をグスク時代から近世期に至るまで追いかけている。

(註4) 近年において福建省内の所城が観光資源としての整備が行われており、旧状と異なる復元をいくつかの所城において見ることができる。

(註5) 城門の防御を強化する目的で、その外側に円弧状に取り巻く城壁と城門を取り付ける。中国国内に見られる大規模な城郭に伴う城門では一般的に見ることができる。

(註6) 馬面は横矢掛り以外に防御の拠点地や見張り台として機能する。その用途によって「敵台」や「墩台」、城壁のコーナー部に取り付く馬面は「角台」という名称が附される場合がある(愛宕1991)。

(註7) 所城の城壁内部が版築である可能性も充分、考えられるが、筆者が実見した限りでは現地において判断ができなかった。

(註8) これらの城壁は、最近では文化財指定になるケースが多く見られ、それに伴って城壁の修復並びに復元が行われるようになっている。この修復、復元は厳密な検証を行っているとは言い難く、かなり旧状とは異なる事例も見ることができる。

(註9) 霞浦県沙江鎮八堡村に所在する八堡城堡では北東部に取り付く出入口が甕城となる。

(註10) 沖縄本島中南部におけるグスクの石積み内部に充填される裏込め石は琉球石灰岩である。

(註11) グスクに供給された石材を切り出した石切場跡はこれまで確認されておらず、また石を切り出した工具なども明らかになっていない。しかし、首里城跡などでは岩盤を広く削り出して平坦面を形成している箇所が御内原において確認することができる(沖縄県立埋蔵文化財センター 2007)。

(註12) 大規模な石積みグスクの中には首里城や中城グスクでは排水のための暗渠や石積み内に溜まった雨水を城外へ排出する排水口を類例は少ないが見ることができる。

(註13) 韓国の城に見られる石積みの下部を補強するため、基部に取り付く低い石積みを當眞嗣一は「基壇補築」として紹介し、グスクとの類似点を

提起している(沖縄しまて協会2014)。

(註14) 沖縄本島北部にあるグスクではわずかではあるが土塁を有する事例を見ることができる。名護市の親川グスクや大宜味村の根謝名グスクでは平場の縁辺部に高さ1～1.5mほどの小規模な土塁を配置している。

(註15) 齋藤慎一、向井一雄2016の中で「日本列島の城館は節目において列島の外からの影響を受けていた」ということを強く主張しており、従来までの城館の認識を新たにさせていくことについて触れている。ここで言う課題には城郭が限定された地域の中で完結するものではなく、地域的な連続性の中で成立していることを前提にミクロな視点で城郭を見ていく必要があることを掲げておく。

【参考文献】

- 黄成助1967『霞浦県誌』成文出版社
木崎甲子郎1986『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社
沖縄県教育委員会1985「ぐすくー沖縄本島及び周辺離島一」『沖縄県教育委員会文化財調査報告書』第53集
當眞嗣一1985「考古学上から見た沖縄のグスク」『文化課紀要』第2号 沖縄県教育庁文化課
當眞嗣一1988、1990「グスクの石積みについて(上、下)」『文化課紀要』第5、6号 沖縄県教育庁文化課
愛宕元1991『中国の城郭都市一般周から明清まで』中央公論社
北垣總一郎1991「沖縄地方における伝統的石造構造物の変遷について」『考古学論攷』第15冊 奈良県立橿原考古学研究所
當眞嗣一1999「久米島のグスク」『文化課紀要』第15号 沖縄県教育庁文化課
沖縄県立埋蔵文化財センター 2004「首里城跡ー城の下地区発掘調査報告書ー」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第18集
今帰仁村教育委員会2004「シイナグスクー範囲確認調査報告ー」『今帰仁村文化財調査報告書』第17集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2007「首里城跡ー御

内原西地区発掘調査報告書一』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第44集
今帰仁村教育委員会2009「シイナグスク2」『今帰仁村文化財調査報告書』第27集
鄭樸生2013『明代の倭寇』汲古書院
蘇勇軍2014『明代浙東海防研究』浙江大学出版社
沖縄しまたて協会2014「グスクから見た琉球の土木技術」『しまたてい』No.69
清華大学出版社2015『福建古建筑地図』
山本正昭2015「与論グスク概観」『しまたてい』No.73 沖縄しまたて協会
福島駿介2016「グスクの成り立ちとその背景」『琉球の築土構木』沖縄しまたて協会
齋藤慎一、向井一雄2016「展望」『日本城郭史』吉川弘文館
山本正昭2017「城時代とグスク時代」『南島考古』第36号 沖縄考古学会
李周旻（編）2017『籌海図編』中華書局

【追記】

本稿を草するにあたって中国・福建省での調査に同行していただいた森達也氏（沖縄県立芸術大学）には多大な御協力を賜った。また、向井一雄氏（古代山城研究会）や臼杵勲氏（札幌学院大学）からは東アジア各地の城郭に見られる城壁の構造、ならびに城郭としての捉え方について、そして石井龍太氏（城西大学）からは本論をまとめるにあたって遺構の解釈についてのご教示を賜った。記して感謝を申し上げる。

この他にも本稿で取り上げた遺跡の現状確認にご同行を賜った宇佐美賢、嘉手納智子、砂川暁洸、木村謙介、西藤優三、麓才良、南勇輔各氏にも末文ではあるが記して感謝の意を示す。